

edge of Philippine culture. For example, it is difficult to understand the human relation behind the *compadrazgo* system discussed in Chapter 14 without basic knowledge of it. It seems that target viewers of the work are Filipinos or researchers who work in Philippine Studies. Notwithstanding, the work is of benefit to researchers from other various fields. Additional explanations would have made the work more accessible to a wider audience, such as researchers doing similar kinds of studies in other places.

Second, Chapter 10 about *tud-om* is difficult to understand due to insufficient explanation. The narrator states that “In general, the song’s messages center on the expression of politely refusing the guest to whom the song is addressed.” But the meaning of this statement is difficult to understand in terms of what is explained in this chapter. In his former book, the author explains this issue differently, arguing that this is a rhetorical effect in which the singer articulates difficulty in the song text, thus enlarging the value of giving expressed in the singing [Buenconsejo 2002: 309–310] This is one of the more important points that require detailed explanation to understand the social function of *tud-om*.

This work employs two kinds of effects of visuals and sounds; 1) The symbolic effect of visual images with sounds, and 2) poetic visual effects. For example, the former appears in the DVD menu as an image of the hands of two persons passing betel nut and the background music of a bamboo zither playing in the style of the 19th century’s Spanish *fandango*. The hands show the main theme of the video, which is the value for human recognition of the Manobo, while the *fandango* suggests the long history of their acceptance of Visayan culture. The latter appears as the layered use of images from *tud-om* performance and the rainy scene in Chapter 10. This effect compels the viewers to imagine the singer’s mind and his song performance as a metaphor for the “washing away” of negative emotion in human beings, just as rains wash away the soil. These kinds of visual effects thus help to articulate the contents of the work to viewers in a more engaging manner.

This work is recommended not only for advanced researchers of ethnomusicology, anthropology and other related fields but also for whoever shares an interest in these fields.

(Taguchi Motohide (田口雅英)・Freelance Composer)

References

- Buenconsejo, José S. 2002. *Songs and Gifts at the Frontier: Person and Exchange in the Agusan Manobo Possession Ritual, Philippines*. New York: Routledge.
- Garvan, John M. 1941. *The Manobos of Mindanao*. Memoirs of the National Academy of Science 23. Washington: United States Government Printing Office.

鍋倉 聰. 『シンガポール「多人種主義」の社会学——団地社会のエスニシティ』世界思想社, 2011, 302p.

はじめに

シンガポールを訪問し、オーチャード通などの中心地だけではなく、少しでも郊外に足を伸ばしたことがある人は、林立する高層の公共団地群に眼を見張った経験を持っているだろう。シンガポールでは人口の82%が政府の住宅開発庁（Housing Development Board）が建設した高層の公共住宅に住んでいる（2008年）。HDBフラットと呼ばれるこの公共住宅の約95%が分譲（持ち家）であり、日本の持ち家率が60%（2004年）であることを考えると、シンガポール人の持ち家比率の高さは驚くべきものである。

シンガポールは、このように総団地化、総分譲化を実現した団地社会であるとともに、「華人」「マレー人」「インド人」「その他」という多様な住民から成る社会でもある。シンガポール政府は敢えてこの分類に人種（race）を用い、例えば、住民に携帯が義務付けられる身分証には人種が明記され、学校教育の第二言語（第一言語は英語）には華人は華語、マレー人はマレー語、インド人はタミル語などというそれぞれの「母語」を選択させ

るなど各々の差異が強調され、人種別の差異化が日常生活の細部に至るまで決定的な影響を及ぼしている。シンガポールで暮らしていくには、団地という標準化された居住空間で生活しなければならないと同時に、多人種社会という一見多様性が謳われる社会において、人種別分類に従って互いに差異化しなければならない。差異化と標準化はともに必須とされているのである。

本書は、この団地というシンガポール人の日常生活に密着して、多人種主義をめぐる標準化対差異化のせめぎあいを描き出すことを試みたものである。シンガポールは周知の通り、独立以来人民行動党政権の独裁的な長期政権でも知られている。政府の力が絶大で、政治のみならず経済、社会のあらゆる分野に大きな影響を及ぼし、国民を管理している。このような一元的管理社会においては、政府の意図とは異なる結果をもたらすかもしれない調査研究を行うことがきわめて困難であり、ましてや団地当局の完全な管理下にある住民は外国人研究者を容易には受け入れない。本書は、このような困難な状況にあるなかで、3年間にわたって団地に住み込んで行った社会学的調査をまとめた貴重な研究書である。

本書の構成と内容

本書は、著者が2009年3月に京都大学大学院文学研究科に提出した博士論文を加筆・修正したもので、序章に続いて8つの章と終章から成っている。以下、各章の概要を見てみよう。

第1章「エスニシティ論の系譜」では、エスニシティの先行研究を区分して整理し、それぞれの限界と問題点を述べている。その上で、国家が人々を固定化した枠組みに押し込めて定着させるというエスニシティを「フォーマル・エスニシティ」、人々が自前で意味を付与し差異化するという流動的、可変的な側面を捉える「インフォーマル・エスニシティ」という新たなアプローチを提示し、このアプローチに基づいて具体的に研究を進めていく有効な対象としてシンガポールの多人種主義を位置づけた。

第2章「シンガポール社会の特質」では、まず、多人種社会、総団地化社会、一元管理社会という

3つをキーワードに、シンガポール社会の特質を説明している。シンガポールでは多人種社会と総団地化を実現することで、標準化だけでなく差異化をも管理下に置いた一元管理社会を実現してきた。この管理の下で社会学的研究を進めるのは、どのような意義があるかについても示している。

第3章「多人種主義におけるアイデンティティの三層」では、多人種主義に関してシンガポールで行われた社会学的研究を検討し、それらを①国民アイデンティティ＝シンガポール人アイデンティティ、②人種別アイデンティティ、③インフォーマル・アイデンティティの三層としてまとめた。さらに、固定的・定着的な②が、流動的・可変的な③へと展開し得ることを示す研究の意義を述べている。

第4章「団地研究における人種の顕在化と潜在化」では、シンガポールの団地研究史を再検討し、初期の時代はエスニシティの統合が進むという楽観的な立場と実際の問題を重視した悲観的な立場で揺れていた研究が、政府公認の立場でしか団地研究が認められなくなったために標準化されてしまい、人種やエスニシティが取り上げられなくなった。90年代以降にはこれらは再び積極的なテーマとなったものの、人種別の差異化として取り上げられ、多人種主義を問い直すような研究は困難になったことを述べている。

第5章「総団地化社会実現後のシンガポール」では、総団地化・総分譲化実現後の新たな団地再開発について、2000年代に入って「土地の有効利用」を大義名分に行われるようになった分譲団地取り壊しプログラム（SERS）を検討し、SERSは、標準化と差異化を両立させた上での「再」標準化として、重要な意味を持つことを明らかにしている。

第6章「分譲団地取り壊しプログラムのもつ意味」では、SERSの問題点を現地紙から丹念に検証し、公的調査結果とのギャップを明らかにした。

第7章「都心部団地における近隣関係の展開と団地再開発」では、前章を受けて、華人が多数を占めるブキホスイ団地A棟という、SERSに指定された団地棟において、取り壊し以前から以後までの現地調査の結果が示されている。住民が共通

の空間をつくり、それを非華人とも共有するなど、住民自ら多人種主義とは異なる独自の近隣関係を展開し、「再」差異化へと向かう動きがあったものの、それは認められず、当局による取り壊しという「再」標準化が行われたのではないかと、結論付けている。

第8章「郊外型団地における多人種関係の展開と団地再開発」では、前章とは別の団地においてマイノリティであるインド人を中心に取り上げ、インド人住民の間でも「再」差異化へと向かう有意義な近隣関係の展開が見られることを明らかにした。しかし、この可能性ゆえに、この団地もまた取り壊しの対象となった。また、取り壊しの事例として各人種共通の食空間として共用された食堂街も取り上げ、標準化／差異化、「再」標準化／「再」差異化をめぐる相克の一端を明らかにしている。

終章には、全体のまとめと本書が明らかにしたことが簡潔に述べられている。

本書の意義と課題

国連の統計（2005年）によると出生国以外で1年以上居住している移民は、世界で約1億9千万人と推定されており、この数は1980年代以降急速に増加している。このように国境を越えた人口移動が増加する現代社会においては、様々な文化的・民族的背景を持つ人々が1つの社会でともに暮らすことは当たり前になりつつある。現代の国家のほとんどは、様々な文化や民族的背景という差異を排除せず、だが一方で、同じ国民という意識を持たせるためにどこまで、どのように人々を標準化するかという大きな課題を抱えている。

本書の大きな意義は、シンガポールの多人種社会・総団地社会を取り上げて、この標準化と差異化という原理的相克の解説を試みたことである。様々な文化的・社会的・民族的背景をもつ者が共に暮らす社会を実現するためのシンガポールの試みは、世界的に注目され、成功例として語られることも多い。しかし、著者は団地の世間話に入れるほどの信頼を住民から得て、公的調査では決して取り上げられないSERSの問題点を明らかにした。その上で、多様な住民が相対的に自立した空

間を構築することこそが多人種主義を実現可能とし、それをより豊かにしていくことにつながると結んでいる。きわめて示唆に富む興味深い結論であり、著者の調査と分析は、シンガポールのみならず同様の課題を抱える多くの国家にも意味を持つものであろう。

ただ、今後の課題であろう点を付け加えるなら、以下の2点であろうか。

第一は、評者が社会学者ではないからかもしれないが、本書のキーワードの1つである「インフォーマル・エスニシティ」が具体的に何を指すのかわかりにくいことである。著者はそれを、人びとが自前で意味を付与した動的・可変的なエスニシティとしているが、本書で具体的に描かれているのは、近隣住民が能動的に作り上げた共通の多人種空間である。ではその空間で作上げられた動的・可変的なエスニシティとは何なのか、もう少し説明が欲しかった。

第二は、住民が能動的に作り上げた多人種空間であったからこそ、政府はその潜在的可能性を恐れて取り壊したのではないかと著者は推論している。確かにそれが一元的管理を徹底させるシンガポール政府の意図だろうとは思いますが、著者の推論に至るまでには、もう少し事例を積み重ねる必要があるだろう。3地点で見られた展開からの推論では、説得力に欠けるように思われる。

周知のように、2011年5月の総選挙でシンガポール与党は「歴史的な敗北」をし、政府与党は、閣僚メンバーから独立以来絶大な権力を行使してきたリー初代首相を外すという人事を行った。まさに「ポスト・リー時代」の始まりである。この「ポスト・リー時代」においては、政府与党の若手指導者は、「上からの民主化」を徐々に行わざるを得ないだろう。一元的管理はどこまで民主化されるのか、それに伴ってSERSのような団地再開発にも住民の声が反映されるようになるのか、近隣住民が能動的に作り上げた共通の多人種空間が可能になるのかなど、今後のシンガポール社会の変容が注目されると同時に、著者の研究の発展が期待される。

(田村慶子・北九州市立大学)